

連続講演会「知舞い学躍る。大妻の空、大妻の夏」

感化する拷問機械 The Air Loom-ジョン・ハラム
『狂気の凶解』(1810)に見る 18 世紀末英国の体系妄想思潮
宇沢 美子 氏 (慶應義塾大学教授)

日時：平成30年 8 月 5 日 (日) 15:00~16:30

場所：多摩キャンパス7号館

(講演教室は、当日、掲示にてご案内いたします)



<講師紹介>

宇沢 美子 (ウザワ ヨシコ/UZAWA Yoshiko)
慶應義塾大学教授。

1981年慶應義塾大学文学部英文科卒、1987年同大学院文学研究科英米文学専攻博士課程単位取得退学。2008年「ハシムラ東郷 イエローフェイスのアメリカ異人伝」で慶大より博士(文学)。2009年『ハシムラ東郷』でヨゼフ・ロゲンドルフ賞受賞。

<講演概要>

慶應義塾大学の名物教授というだけでなく、もつともつと世間に向けておしゃべりすれば、大袈裟でなく人生が、少なくとも学問観が、大学観が変わる人が出るはずだ。時折り正式の学会に出て何か発表することがあっても、他の発表者が少し気の毒になるほどの水際だった着眼と、聴く者を高揚させるおしゃべりの魅力をそなえている。宇沢氏が本気で研究活動に力を入れ出した1990年代、身体文化論が神経系美学へと劇的に展開する情勢に一挙に魅了されたふうで、人文学の21世紀に向けてのこうした華々しい展開の早々と出た良く整理された目次案と僕など見ている名著、「女は映る」で読書界を驚愕させた。女性をめぐる新しいラディカルな人文学的アプローチを語らせたら現状、宇沢美子を抜く者は日本にはいない。見落とされて来た日米文化交流史に新生面を開きつつもあるが(千代田校での演題)、今回多摩校では宇沢氏本領発揮のラディカル・フェミニズムから見た"近代"の問題が真っ芯に語られる。レジェンド誕生の瞬間に立ち合うべし！！



(大妻女子大学副学長 高山宏先生 記)